

## 21世紀の日本のかたち（38）

### － 日韓大学間交流 －

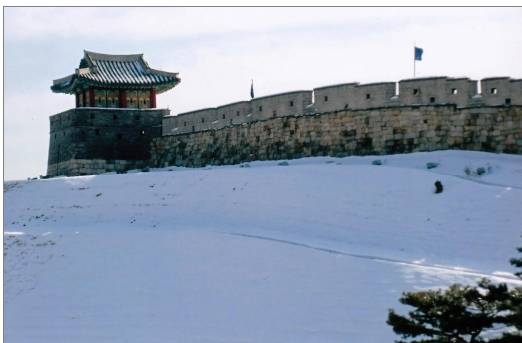


戸沼幸市  
＜(財)日本開発構想研究所 理事長＞

#### 1. 冬のソウル

今年の正月末、ソウルに出掛けてきました。昨年10月にオープンした羽田国際空港からソウル市中にある金浦空港へ、ほんのひと飛び、2時間ほどで到着いたしました。私の乗ったのは日航と大韓航空の共同運航機で、乗客は春節に向けた里帰りの韓国の人々が大勢乗っておりました。羽田も金浦も通関は簡単で、東京とソウルは全く隣の都市です。ソウルの街も表示看板がハングルでなければ日本の都市と区別がつかない程です。

それでも今年の冬は韓国も寒気が厳しく、街中には雪があちこちに残っており、ソウルの大河、漢江も薄く凍っておりました。朝鮮王朝を代表する宮殿の景福宮、水原華城、そして現在の大統領府青瓦台も寒気の中に引き締まって見えました。



水原華城

この季節、韓国料理は最高で、冬のキムチはなんとも美味でした。

今回、私の泊まったソウルのホテルでもNHK

が見られ、たまたま1月26日の深夜にはサッカー・アジア杯準決勝の日韓戦を見ることになりました。この試合はPK戦で日本がようやく勝ち、熱い試合でした。30日の日本対豪州の決勝戦は、延長戦に入って李忠成選手が長友選手のクロスを空中で受け止め、左足、胸のすくような鮮烈なボレーシュートを決め、日本がアジア杯を手に入れました。

日韓の青年が混然一体となった熱戦に、心からなる拍手を送った冬のソウルの夜でした。



大統領府青瓦台

#### 2. 日韓大学間交流

今回、私がソウルに出向いたのは、日本・早稲田大学と韓国・檀国大学との大学間協定の調印式に立ち会うためでした。両大学間で学生・教員の交流、共同研究の実践などを目指そうというものです。

早稲田大学は戦前から、中国、朝鮮からの留学生を多く受け入れ、戦後もアジアの大学、特に中

国、韓国の多くの大学と協定を結び活発に交流を続けております。早稲田大学と協定を結んだ韓国の大学は、今回の檀国大学で65校目になります。

檀国大学は韓国において1947年、4年制の私立大学として開校したもので、現在ソウル近郊に二つのキャンパス（天安キャンパス、竹田キャンパス）をもち、2万人余の学生が学んでおります。

2009年には、韓国において世界レベルの研究センター大学に選定され、グローバル時代を見据えた気鋭の大学です。最近、同大学附属東洋学研究所では、漢字文化圏の代表的辞書となる『漢韓大辞典』全16巻を完成させました。



漢韓大辞典（檀国大学附属東洋学研究所編）

さて、今回の交流協定締結に至るまでには、それなりの日韓交流の経緯があります。

35年前、一人の韓国青年が早稲田大学の都市計画研究室に入ったことに始まります。檀国大学の助手で、建築・都市計画専攻の金英厦青年でした。日本人学生と同じプログラムに入り、修士、博士課程を修了し、1982年博士号を取得し、母校に戻りました。そして金青年は教授になり、日本モデルも参考にしながら学生の指導に当たりつつ、大学では要職を、学会では副会長、会長を務めました。この間、早大と檀国大を軸に広く日韓大学間交流に活躍してくれました。そして、改めて日韓大学間交流を新しい目で展開しようと、大学の命を受け、今回の交流の橋渡しをしてくれました。

金英厦青年は義と情に厚く、頑張り屋で、留学時代日本人学生にも強い印象を残し、彼を通して

韓国のことなど多くのことを学びました。今も印象深いのは、檀国大学の当時の総長、張忠殖先生が日本に来られる度に金青年を呼んで励ましたことでした。張忠殖先生は現在、檀国大学院長の立場として大学の経営全体を見る立場にありますが、私より少し年長で、日本を深く理解され、東洋の兄貴分といった風格があります。

私にはいま一人古くからの友人、金裕赫先生がおります。今回、私は檀国大学名誉教授会の親睦の席に招かれ、時代を共有した仲間として兄弟のような情愛をもって迎え入れてくれました。

金裕赫先生もまた、早稲田大学で博士号を取得し、セ・マウル（新しい村）運動の実践と理論の指導者として、韓国にとどまらず、日本、モンゴル、中国との大学間交流に力を注いでおります。

早稲田大学に籍を置いていた私の場合、40年前に始まった韓国からの留学生との交流が今も続き、交流の輪がなお広がっております。とくに直接世話をした留学生で博士号を得て帰国した人々が多数おり、ネットワークの核になっております。諸氏とは家族のような付き合いをしましたが、多く母校に戻って教職に就き活躍していることはうれしいことです。

早稲田大学全体となれば、非常に多くの留学生がおり、韓国稲門会には実に多くの会員が名を連ね、各分野でグローバルに活躍しています。

現在、早稲田大学と韓国の大学との協定校は65に及び、留学生は1,000名を超えています。協定校との交流の仕方は学生のダブルディグリー、人事交流を含め多様ですが、高麗大学、延世大学と早稲田大学、慶応大学が4校持ち回りで毎年テーマでシンポジウムを持つ形式もあります。

### 3. 今後の日韓大学間交流のテーマ

40年前、私が韓国の大学と交流を始めた時代と

現在とでは、両国を取り巻く環境が大きく変わったことを改めて気づかされます。

私が初めて韓国を訪れたのは、1970年夏でした。当時の留学生、李在雨君（'82博士号取得）の案内で韓国の集落調査のため2週間ほど各地を見学する機会がありました。当時のフィールドノートを見返してみると、九州小倉から航路釜山に渡り、日本海（東海）側を慶州、蔚珍、江陵と北上し、江陵から半島を横断してソウルに至るというものでした。

陸路は現地調達した車で移動しましたが、雨の日には道路がぬかって皆で車を後押ししたほどでした。街や農村のたたずまいも簡素、質素なものでした。各所に朝鮮戦争（1950～53）後の緊張感もありました。

ソウルでは中心部を流れる漢江が前日の大雨で水かさが増し、両岸一帯に密集していた零細集落が浸水にあい、人々が自力で修復に大わらわであった様子が目に焼き付いております。

1970年以来、ほぼ5年おきに韓国を訪ねる機会を持ちましたが、その都度、その変貌、発展ぶりには驚かされます。今や、経済的には先進国と肩を並べ、ソウルも東京と変わらない都市になりました。かつてアジアにおける日本を先進モデルとして学ぼうとした韓国は、今では対等に北東アジア、東アジアの国として時代を学び合おうという気構えを見せております。

今や、韓国は北朝鮮との問題を抱えつつ、果敢にグローバル化に取り組んでおります。

日韓両国には共通の条件もあります。人口減少、少子化に向かっており、小資源国で技術立国をめざしております。

韓国はもともと教育には熱心な国ですが、この

状態の中で、現在、教育に特段に力を入れております。韓国には大学数372校（大学校、専門大学、教育大学、産業大学、技術大学）、学生数326万人にもなります。これらの大学は、情報、教育のグローバル化の中で生き残ることに真剣に取り組みはじめた様子が各所に見られます。

一方、日本では、大学778校、学生数289万人、短大395校、学生数16万人、高等専門学校58校、学生数6万人（2010年5月1日現在）ですが、少子化の中で、将来的には大きく縮退すると予想されています。

日本では大学生の内向き指向が指摘されておりますが、日本の大学は欧米を視野に入れると共に、まず身近な韓国、中国など、北東アジア、東アジアの中の大学であるという近未来の常識を先取りすべきだと思います。

今回のソウル、檀国大学と早稲田大学の交流協定の調印の際に、北東アジア、東アジアの中の大学のあり方、大学間交流のあり方について、ソウルと東京において、幅広く議論するシンポジウムを持つことなども話し合っただけで東京に戻ったところです。

#### 【資料】

「学校基本調査-平成22年度（確定値）結果の概要」（文部科学省）

「大韓民国 教育部 統計」

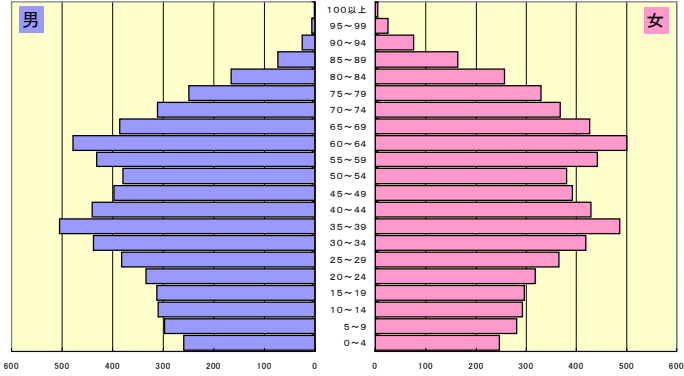
#### 【注】

文中掲載の写真は戸沼撮影

(2011. 02. 15)

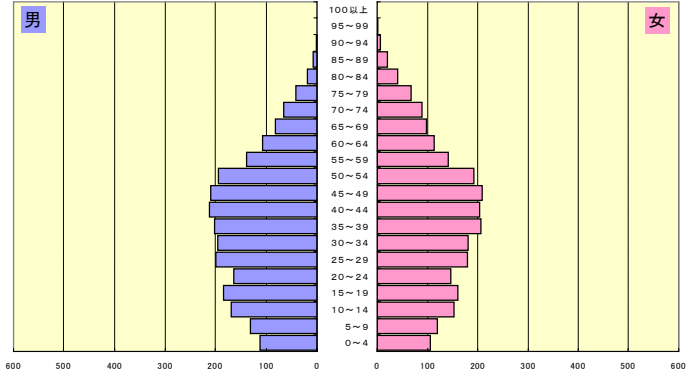
# 日韓 男女年齢5歳階級別 推計人口 (2010年・2030年・2050年)

2010年 日本



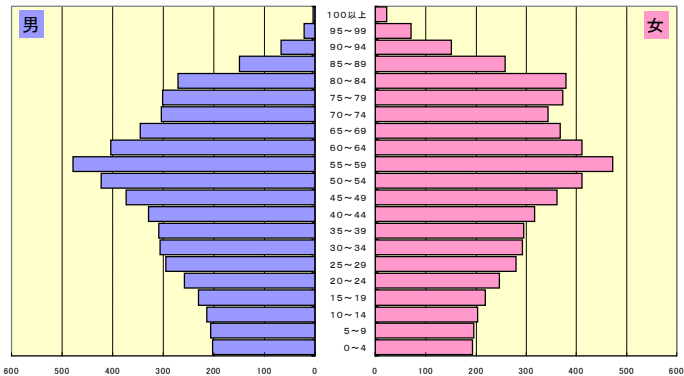
単位：千人

2010年 韓国



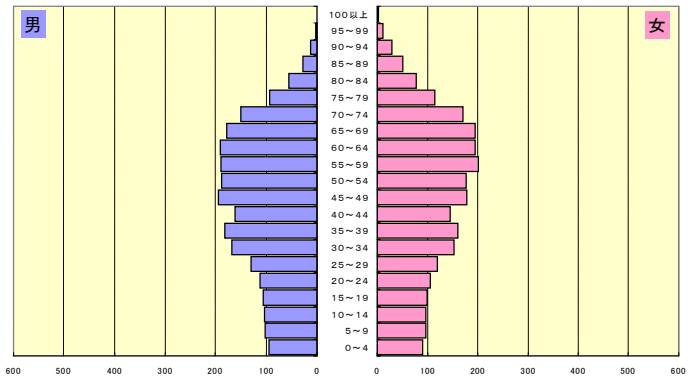
単位：千人

2030年 日本



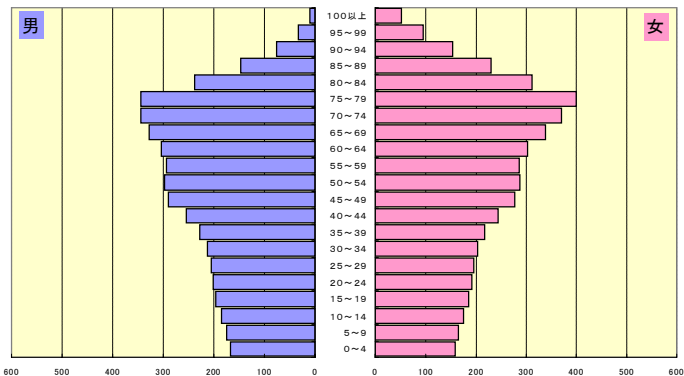
単位：千人

2030年 韓国



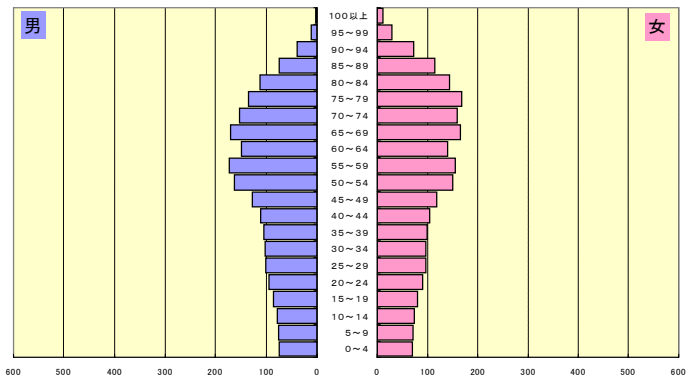
単位：千人

2050年 日本



単位：千人

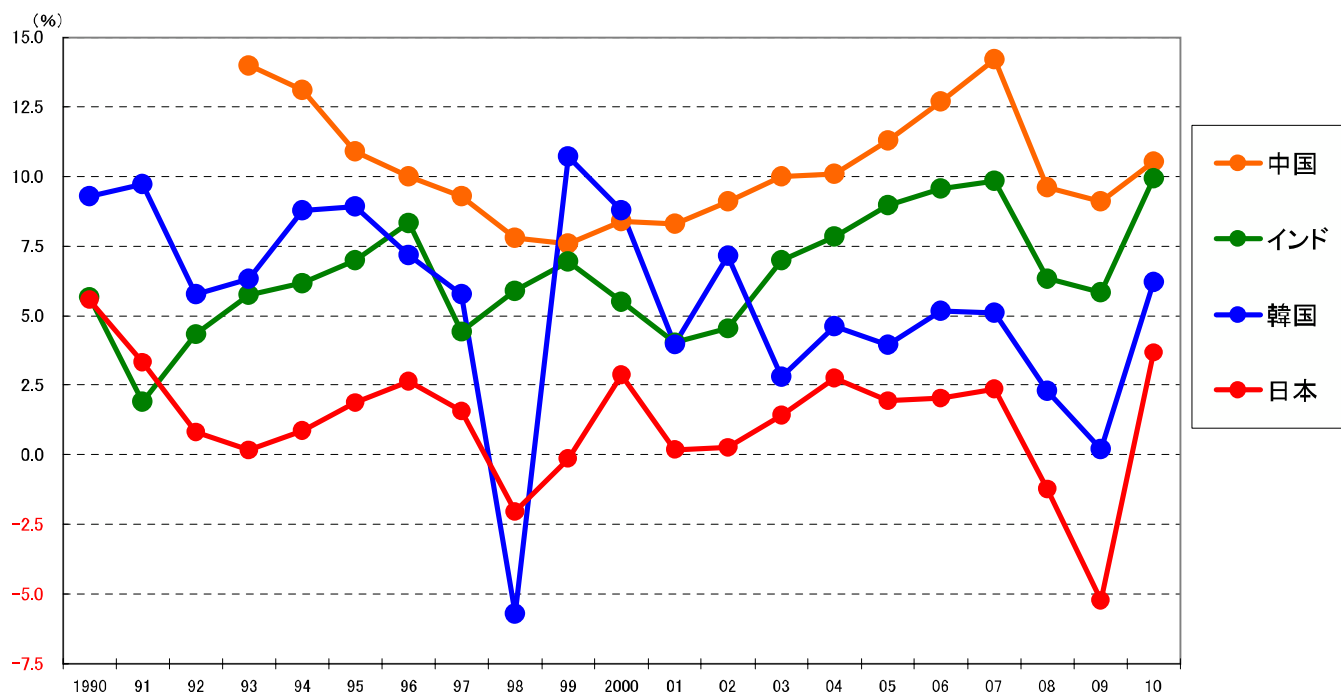
2050年 韓国



単位：千人

資料: U.S. Census Bureau, International Data Base.

# 実質経済成長率の推移(1990～2010年)の比較



資料: Economic Outlook No 88 - December 2010